

特殊清掃員

ライター 青木麟平

現場につくと、まず防護服に袖を通し、それからゴム製の手袋と防臭マスクを身に着ける。ドアを開けると、部屋の中はマスク越しにも匂うほど強烈な腐敗臭が立ち込めている。まず始めに特殊な二酸化塩素をあたり一面に噴霧し除菌を行う。匂いの原因は、腐敗が進んだ遺体から漏れ出した血液や体液である。死体そのものは警察によって引き取られているが、血液や体液はその場に残っており、フローリングや畳の下まで染み込んでいる。これらをきれいに清掃し、除菌、消臭処理を行うのが特殊清掃員と呼ばれる人たちだ。

株式会社ロードは東京と神奈川を中心に関東 5 県で特殊清掃と遺品整理の仕事を請け負う会社である。現在 7 名の従業員を抱える同会社には、月に平均して 40 件ほどの依頼が来るといふ。会社の代表である鎌田さんは快く取材に応じてくれた。「正直な話、慣れはありますよ」鎌田さんは特殊清掃という仕事について淡々と語ってくれた。最初は戸惑うことも多く、作業がスムーズにいかないこともあったが、多くの現場を経験するにつれ、仕事としてある程度割り切れるようになったという。一方で故人に思いを馳せることもあるという。「現場に入るといつも誰かに見られているような感じがする。供養の気持ちをもって仕事に取り組んでいる。雑な仕事はできない」

近年、日本の社会の高齢化は深刻な問題であり、孤独死する人も増えている。最近では新聞配達や宅配サービスを行う人から警察に連絡が入り、孤独死の発見につながるケースも増えているという。孤独死の場合、遺体が長期間放置されることも珍しくなく、腐敗臭もその分ひどくなることもある。鎌田さんはその匂いについて次のように語る。「遺体から発せられる匂いは孤独に死んでいった人の最後の叫びだと思う」

取材の最後で鎌田さんは次のように言った。「理想は孤独死が起こらない社会だと思う。そのためにも身内や親しい人で一人暮らしをしている人がいれば、こまめに連絡を取るようにしてもらいたい」日々過酷な現場と向き合う特殊清掃員の言葉だけに、より切実に感じた。

編集後記

今回のインタビューを終えて、私は特殊清掃員と呼ばれる人々がいかに仕事に対して熱心に取り組んでいるかを思い知った。彼らは自分たちの仕事に誇りを持っており、たとえ人から蔑まれようと、気にすることはしないだろう。彼らは自分たちの仕事死者を扱うものであると自覚しており、またそれが尊いことであると自負しているように感じた。現在の孤独死が増えているこの日本の現状を思い浮かべると、私は一人ひとりが他者に対して慈しみの心を持つことにより初めてこの問題は解決されるのではないだろうかと思感した。

(青木麟平)